

ヨーロッパ視察報告＜５＞

視 察 項 目	表敬訪問
視 察 日 時	２０２４年１１月７日（木） 午前１１時１５分～１９時１５分
視 察 先 名	シェフィールド市役所、シェフィールド市議会 シェフィールド子ども大学 バーチャルスクール オールセインツカトリック高校（All Saints' Catholic High School）の音楽の取組み
説 明 者	Jayne Dunn 氏 Tom Hunt 氏 他
担 当	石田 康博

【シェフィールド市長と議長との会談】



市長 ジェイン・ダン（Jayne Dunn）

議長 トム・ハント（Tom Hunt）

懇談は市長貴賓室（パーラー）にて行われた。冒頭、シェフィールド市の市長と議長より、歓迎の御挨拶をいただいた。「川崎市とは平成２年（１９９０年）から友好都市となり、川崎市制 １００ 周年記念の年に、視察団とお会いできて嬉しい」と、歓迎の意を表された。

松原団長からは、福田紀彦川崎市市長より預かった親書を、ジェイン・ダン市長に手渡した。親書は、川崎市制 １００ 周年の祝辞をいただいた事への感謝と、両市の絆を誓う内容だった。

議長からは市議会についての説明があった。地方議員の任期は通常4年であり、市長と議長は、市議会議員の中から選挙で選ばれる。また、市長の任期は1年と短い。シェフィールド市議会は、グリーンパーティー、労働党、自由民主党の3つの政党で構成されており、トム・ハント議長は、労働党に所属している。

加えて、シェフィールド市の概要説明もあった。市はイギリスの中で4番目に大きく、経済的にも発達している都市である。市として、市内産業を成長させるため、先進的なテクノロジーを推進している。グローバルで、外に開かれた都市である。世界各地の企業や投資家と、交流を図っている。

日本とも、商業的な繋がりを持っている。引き続き、日本との交流を深めていきたいと語っていた。両代表の御挨拶の後には、市職員の **Nik Hamilton** 氏他、数名の職員も加わり、意見交換を行った。

懇談では、ジェイン・ダン市長の趣味の御紹介が御本人からあった。市長の趣味は、絵を描く事だと話す。市長貴賓室には、水彩画を飾られ、その描いた絵を絵葉書にして展示していた。それらは全て、市長、自ら描いた作品であり、見事なものだった。



印象的だったのは、「鉄工所で働く女性の像」を描いた水彩画である。絵の被写体となった像は、市役所に近い広場にあり、市の象徴的な存在となっている。産業革命以降は、女性も鉄工所で働き、街の発展を支えていた。街の歴史を現す、市の象徴的な像となっている。絵葉書を売却して得た収益を、チャリティーとして寄付している。

イギリスでは友好のある来客者に対して、ケーキと共にイングリッシュティーで、おもてなしをする文化がある。懇談会は、そのスタイルで、立食にて行われた。意見交換では、サッカー、女性の社会進出、地域経済等、それぞれの話題に花を咲かせた。

本市と友好都市シェフィールド市との交流を図る上で、絶好の機会となった。首長同士による交流も大切だが、議会や民間も積極的に交流を図っていくべきである。多方面にわたる交流こそ、両市の発展の礎になると考える。こちら側の至らない英会話も、お互い自然と笑顔に変わっていた。

＜シェフィールド市議会議場＞

市議会議場を見学した。議場にある机は、明治30年（1897年）から使用している。椅子は新しい。市長席の上に紋章を掲げている。麦の束と水で型取られ、歴史と重厚感を感じる。その上にライオンの紋章を掘った彫刻は、貴賓を感じる意匠であった。

議場の議席は、84席ある。投票する際は、電子投票方式で行われている。10年前に導入した。以前は、手挙げ方式で採決を行っていた。また、昭和2年（1927年）前までは、一般傍聴は出来なかったが、現在は傍聴を許している。議会中継は行っている。



議場の解説以外に、歴代市長と市庁舎の建築に話は及んだ。最初は領主が市長を務めていた。これまで127人の市長が誕生している。昭和11年（1936年）に初の女性市長が誕生している。市庁舎は明治22年（1889年）

から建設が始まり、明治 29 年（1896 年）に建設が終了し、明治 30 年（1897 年）にビクトリア女王によって開設している。それから長年にわたり、使用している。

市長の任期については、昭和 49 年（1974 年）までは、実権を持った市長によって、全てを判断していたが、長い在席期間だと汚職につながる危険性があるため、任期を 1 年としている。

【シェフィールド市の街づくり】

＜市の概要＞

シェフィールド市は、首都ロンドン市から北に約 200 キロの位置にある。人口は約 56 万人となっている。産業革命以来、鉄鋼業が盛んで、刃物や金属製品の製造により栄えた、イングランド中部の工業都市である。ものづくりの街としては、本市の特徴と類似している。

近年では、シェフィールド大学先進製造研究センター（AMRC）と米国ボーイング社の連携も進んでいる。ボーイング社は、シェフィールド市に工場を建設し、欧州の拠点としていた。工場では、主力短距離機 B737 と、広胴機 B777 向けのフラップを駆動させる、アクチュエーション・システム関連の部品を供給している。地域経済の発展に貢献し、良い影響をもたらしていると話していた。

平成 2 年（1990 年）シェフィールド市と本市の間で、友好都市提携を結んでいる。川崎市議会からは、平成 16 年（2004 年）に、川崎市議会視察団により、シェフィールド市役所を訪問している。私もその一人であった。

＜中心エリアの再開発＞

シェフィールド市役所職員の丁寧な誘導のもと、市役所から徒歩圏内の中心エリアを、徒歩にて視察した。再開発の予算は 4 億ポンドである。第 1 期の開発は 20 年前に終了している。

コロナ禍の影響により、商業施設に入っていた店舗の多くは移転していた。全体的に相当数の店舗の入れ替わりがあった。市では、その変化に対応した、再開発を主導している。例えば、道路を閉鎖して広場を拡大し、

歩行者優先の街づくりを進めた。ゆっくりと歩行出来る空間を増やし、ウォーカブルな街を目指した。

公園では、雨水を再利用するシステムを導入し、環境への配慮を行っている。公園の植木はシェフィールド大学のアドバイスにより、この地域の気候に適した植物を選定している。雨の降らない時でも育ちやすい樹木を選び、手入れをしなくても良い植栽を選択している。

市が所有しているビルのテナントは、市で選定している。店舗には、地元の店を優先し、入居を促進している。この街でないと買えない商品を提供するショップを選んでいた。小さな会社でも、新しいビジネスを始めるスタートアップを支援している。

老朽化したビルは、修繕費が高額となるため、民間事業者の進出は慎重だった。そこで、市から、進出した店舗の事業者に対し、援助金を支出している。小さな店舗等は、広域展開しているチェーン店ではなく、市内にある店舗を誘致してきた。2階以上はオフィスとして貸している。

マンションの開発は、市が主体となっており、民間に売却している。住居は買った本人が住む事を条件としている。購入者は、投資目的での売買はできない。こうした条件をクリアにする事で、コミュニティーの豊かさを実現している。

古いビルの殆どは、リスティッドビルディングとして、壊してはいけないルールとなっている。外壁は残して、内装だけを新しくしている。

日本の制度と異なる点は、物件の売買等を自治体主導で行い、店舗の誘導まで行っている点にある。地域の産業を大切に、店舗の進出を制限するあたりは、日本の自治体の制度では難しい。学ぶべき点は、そこにあると考える。

市が総合的なデベロッパーの役割を担っていた。「土地の取得」「建築」「販売・貸し出し」、それに加えて「管理」（規制）を担っている。これらが全てとまでは言えないが、コンパクトシティが造られている背景を知った。市内産業を守り、コミュニティーを豊かにする取組は、川崎市立地適正化計画（案）の策定の主旨と、合致している。誘導政策を本市議会で議論する上で、参考としたい。



<Sheffield Winter Garden>



シェフィールドウインターガーデンは、街の中心にある温帯温室である。イギリス国内では一番大きな、ガラス張りの建物だ。平成 15 年（2003 年）にエリザベス女王により、開設された都市型温室である。ホテルとギャラリーに隣接し、中には 2,000 種類以上の植物が植えられている。市民の憩いのオアシスである。

<Crucible Theatre. Library Theatre>

街の中心部には、クルーシブル劇場とライセイム劇場の2つがある。このような狭いエリアに2つの劇場が揃っているのは、国内でロンドンとシェフィールドのみである。

クルーシブル劇場で有名なのは、スヌーカー選手権のチャンピオンシップを行っていることである。ライブラリーシアターの中には、中央図書館もある。昭和9年（1934年）に建設された時に、当初は無料で鑑賞できる講堂として建設され、現在では、映画、ダンス、フォークミュージック等、様々なエンターテインメントを観る事ができる。

<Cambridge Street>



ケンブリッジストリートコレクティブフードコートは、フードホールとなっている。多国籍の食事を提供する、20店舗の飲食店からなる。店内の85パーセントは、市内事業者が入店している。古い建物を改築した部分と、新しく増築した部分により、モダンでお洒落な空間となっていた。市民の交流の場であり、飲食を楽しむ市民で賑わっていた。また、地元に貢献している施設として、表彰も受けた建築である。

都市の中心となるシティーセンターは、近隣住民のコミュニティーの核となる施設として開発された。住宅については、街の中心の近いところに、2万戸の住居を開発している。フードホールを中心に、生活に必要なものを立地させる計画としている。

センター周辺の建物は、再開発の対象となっている。元々はレジャー用の商業施設が集積しており、店は少なかったが、民間を誘致するには、予算がかかり過ぎるため、市が再開発の中心となり、援助金を出す等して、民間の事業者を誘致してきた。

【シェフィールド子ども大学】

シェフィールド市役所内の会議室にて、説明を受けた。現地視察は行っていない。

<概要>

子ども大学（Children's University）（以下 CU）とは、学校と提携して子どもたちの学習意欲を育む慈善団体である。学校内外での課外活動への参加を奨励し、称賛することで、子どもにとってのプラスの影響をもたらすよう取り組んでいる。CU は、イギリスの各地にある。シェフィールド子ども大学は、2008 年に設立され、これまで学校の通常の授業時間以外に、合計 300 万時間にも及ぶ質の高い教育を提供しており、国内で一番大きい規模を誇っている。年間の参加者は、1 万 5 千人である。CU クレジット（単位）を取得している生徒は、3 万人に及んでいる。50 校が参加しており、CU の活動を提供する場所は、180 か所ある。

また、南ヨークシャー全体に、CU はある。シェフィールド子ども大学を中心にして、様々なプロジェクトを実施している。シェフィールドハラム大学は、このプログラムの重要なパートナーとなっている。

なお、シェフィールド子ども大学は、シェフィールド市議会の取組である。

<プロジェクトの目的>

活動方針は、「楽しく勉強する」事にある。必要なスキルの開発を中心に、子ども達に自信を付ける教育を実施している。子ども大学には、様々な背景を持つ子どもが集まっている。自分は駄目な人間ではないと気付かせ、自分の可能性を発見してもらう活動を行っている。

CUはスキルビルダーパートナーシップと呼ぶ組織と連携している。子どもたちがCUに参加する事で、教育機関、企業、若者、家族等、様々な人が生活に必要な8つのスキルを習得できる。

- 1 リスニング 2 会話 3 問題解決 4 創造性
5 ポジティブ 6 高い目標 7 リーダシップ 8 チームワーク

子ども達は卒業していくが、改善したデータを集積している。CUに参加した子ども達は、学校の出席率が上がっている。算数と国語の成績も上がる等、一定の成果を出している。全ての活動は、市が行っている。

活動の目的は、子ども達に「シェフフィールドの子ども」として自覚してもらい、自信を付ける事にある。市では、子ども達を中心にして、街が発展していく事を期待している。そうした意思を子ども達にも伝えている。

一番大事にしているのは、「楽しんで活動」していく事にある。こうした活動を通じて、子ども達は、数々のスキルを身に付け、成長している。それを子ども達自身、自覚する事が大事だと説明していた。

<プロジェクト・イン・ア・ボックス (YES CHEF! PROJECT IN A BOX) >

プロジェクト・イン・ア・ボックスとは、子ども大学取組の一つであり、箱詰めされた教材を子どもたちに提供し、実践的な学習体験を提供するプログラムで、毎年実施されている。このプログラムは、10年以上前に始まった。南ヨークシャーで50校を超える学校に、ボックスを提供している。各学校のスタッフが、6から8週間にわたって、12人以上の生徒を対象に、課外クラブプログラムを提供している。このセッションに参加できる年齢範囲は、KS1（5歳から7歳）からKS3（11歳から14歳）までとなり、生徒の多数はKS2（7歳から11歳）である。

プロジェクトの目標は3つある。1つは、50校以上の学校にプロジェクトボックスを設置して、500人以上の生徒にプログラムを体験してもらうこと。2つに、生徒があらゆる生活において気候がどのように影響してい

るか考える思考を支援すること。3つに、ボックスの中には、高品質で再利用可能な物を提供すること。

シェフィールド市を含むサウスヨークシャー都市州における昨年のプログラムは、イエスシェフ (YES CHEF!) というものであり、子どもたちの料理の腕を磨くとともに、食事の計画、残り物の活用、フードバンクの役割などを学ぶ、食育をテーマとしたプログラムだった。多くの子ども達は低収入層の家庭で育っている。低予算でも作れる、健康的な料理を教えた。このプログラムの製作にあたっては、シェフィールド大学とシェフィールドハラム大学が支援しており、ロードホッグ財団という財団がスポンサーとなっている。

また、医療に関するアクティビティでは、シェフィールド大学の医学部の学生に協力をいただいた。子ども達が手術室に入って、手術を真似て、擬似体験を行った。

今年のボックスのテーマは、シンククライメイト (Think Climate!) である。「環境（気候）について考えよう」をテーマにした。環境汚染といったネガティブな考えではなく、どうしたら環境改善に貢献できるかを、テーマとしている。

全ての活動が子ども達の生活に必要なスキルとなる。将来、就職した際に必要で役立つスキルを盛り込んでいる。こうした活動を通じて、将来の職業に対する展望を持てるようにする。

< 8つの気候セッション >

- 1 低炭素ピザ活動の作成
- 2 緑の屋根瓦の報告
- 3 植栽可能なグリーティングカードの作成
- 4 再生可能エネルギーのオーバークラフトの作成
- 5 持続可能な住宅のための断熱材の調査
- 6 プラスチック包装なしのバスボムの作成
- 7 持続可能な学生制服の作成
- 8 持続可能な排水システム (SuDS) の調査

8つのアクティビティーの1つ「低炭素ピザ活動の作成」の説明があった。例えば、ピザを買ったら、どの程度の二酸化炭素を排出するかを想像する。トマトだと、どこで生産されているかについて考える。夏ならトマトはイギリスで採れる。季節を変えれば、ヨーロッパから飛行機で輸送してこななければならない。夏にトマトを食べれば二酸化炭素の削減につながる。子ども達に、夏にトマトを食べてもらう事を考えてもらう。

南ヨークシャーでは50校、シェフィールド市では18校、参加している。来夏にはシェフィールド大学に集まり、大きなイベントを実施する計画である。この中から環境のエキスパートが誕生するのを期待している。

活動を維持するための財源は、学校からの支出と企業からのスポンサーシップで賄われている。年間予算は、約10万ポンドを必要としている。

【バーチャルスクール】

シェフィールド市役所内の会議室にて、校長であるヘレン・バニエル氏より、説明を受けた。



バーチャルスクール（Sheffield Virtual School）とは、2歳から18歳までの子どもたちの教育サービスをコーディネートする取組であり、それぞれの生徒に関わる教育機関やソーシャルワーカーと協力し、教育のあらゆる段階で若者が潜在能力を発揮できるようサポートすることを目指している。対象の子どもたちは、シェフィールドや他の自治体にある様々な教育施設に通っており、バーチャルスクールが直接教育を提供しているのでは

ない。子どもたちの出席状況や達成度などのモニタリングなども行いながら、対象の子どもたちが適切な教育機関で十分なサポートを受けられるようにする役割を果たしている。

バーチャルスクールの対象者は、以下の3つのグループである。

1 Children Looked After (CLA)

シェフィールド市によって養護されている子どもたち。具体的には、里親や児童養護施設などで生活している子どもである。

2 Previously Looked After Children (PLAC)

公的な養護の対象だったが、養子縁組や親族の監護下に入った子どもたち。これらの子どもたちも学校で適切な支援を受けられるよう、アドバイスや指導を提供している。

3 Children with a Social Worker (CWSW)

現在または過去にソーシャルワーカーの支援を受けた子どもたちも対象としており、彼らの教育を促進し、学校でのサポートを確保している。

シェフィールド市が保護している2歳から18歳までの子ども達650人が在学しており、一旦入学すると引っ越ししても在席は可能となっている。

職員は心理学者も含めて12名いる。特別支援を必要とする子ども達に対応した、専門職員も含んでいる。校舎はなく、バーチャルな形態なので、市内の各学校を利用している。

バーチャルスクールの趣旨は、全部Aの頭文字からなっている。

- 1 Attend アテンド（出席する・付き添う）
- 2 Attain アテイン（成績を上げる・達成する・遂げる）
- 3 Aspire アスパイア（自分に自信を持つ・目指す・志向する）

スクールに入学する子ども達は、現在、保護下にある子どもと、今まで保護の対象になっていた子どもも含んでいる。子ども達は、教育係と福祉系の職員と一緒にプログラムを組む。教育戦略を明確にしてから、スクール活動を始めている。

バーチャルスクールには、様々な部門の専門家がいる。活動内容は、保護下にある子ども達をコントロールするというよりは、大学、養父母、ホーム等、あらゆる関係者の声を聞く事にある。大事なのは、保護下にある子ども達を、学校に行かせる事にある。行けない子どもに対しては、学校以外で教育を受けられる居場所を用意している。

クリエイティブカリキュラムの目的は、子ども達に自信を付けて、他の子ども達と、相互のコミュニケーションをとれるスキルを身に付ける事にある。

年間を通じて、学校の課外で沢山のプログラムを行っている。バーチャルスクールでは、クラブ活動もあり、子ども達の参加を支援している。市以外の場所を活用している。子どもが一人で参加するのではなく、養父母も一緒に参加している。

バーチャルスクールは、色々な団体から支援を受けている。スクール側から料金を支払うよりは、親切心で支援を受けている。最近の活動の事例では、公園でDJ、ボクシング、野外でのアートをする森の活動、小屋を造る、カヌーに乗る、街に出て音楽フェスティバルに参加する等、多岐にわたる。子ども達自身、舞台に立つ事もある。そこでは、自分たちで詩を作ったり、読んだりしている。人気があったのは、夏の風揚げだった。

市内には、クリエイティブシェフフィールドという美術やアートワークの活動を提供している所がある。一緒に活動して、子ども達の作品を最終的に、ギャラリーで展示している。

別のプロジェクトでは、リーディングボランティアがある。本を読むボランティアを募集している。ケアを受けている子供達のために、小学校で本を読んでもらう。本を読む活動は、週に1回行っている。サービスを受けた子ども達の成績を追うと、リーディングボランティアの活動を受け

た子どもの方が、成績は良くなっている。また、生活に必要なスキルを身に付ける事ができていた。

ボランティアは、退職者、個人事業者等、色々な立場の人がいるが、安全のため身元調査をして確認している。バーチャルスクール側で、マッチングもしている。リーディングボランティアには、コーディネーターが存在する。また、各種の支援に必要な教材も作っている。

＜質疑・応答＞

Q 1 : 義務教育との関係は。

A 1 : 義務教育は最優先されるべきだと考えている。学校によっては、子どもに合っていない場合もあるので、学校を変えて、教育を受けられる場所を探している。その場合、イギリスのナショナルカリキュラム（義務教育）に則った教育を施す。バーチャルスクールの活動においても、最終的には全てがナショナルカリキュラムにつながっていくような仕組みになっている。

Q 2 : 障害者の子どもの受け皿については。

A 2 : バーチャルスクールにおいても、特別支援の専門部門がある。学校にも特別支援の部門があって、相互に連携して一人の子どものサポートをしている。特別支援のサポートに必要な子どもが居る事が分かれば、それ以外に、追加のサポートを行っている。種類や頻度を変えながら対応している。また、ある子どもが、特別支援が必要になった場合は、認定をして義務教育の中で、必要な教育と健康といったプログラムを組む事になる。個人に必要なガイドラインを作っている。学校の教育を受けている間、そのプランを実施し、1年に一度、見直している。

【オールセインツ カトリック高校】

(ALL Saints' Catholic High School)

高校は、生徒の対象年齢を 11 歳から 18 歳としている。生徒数は 1,387 名で定員は 1,290 名である。

＜音楽の取組＞

ミュージックアンバサダーであるイージーさんとジェスさんの 2 人の生徒に、学校内を案内していただいた。各グループの練習を交流も交えながら視察した。音楽のレッスンは、教員等による指導を受けていた。学生の参加料は無料となっている。今回の視察は、校舎内の視察ではあったものの、学校教育そのものを視察したわけではない。

放課後の音楽活動を視察した。32 の音楽のグループがある。当日は、オーケストラ、弦楽器、木管楽器、上級クラス等の演奏の練習を見学した。音楽の取組は、当該校の生徒に限らず、地域の子ども達を対象としている。高校に通う学生に限定していない点は論点として注意が必要だ。

教育方針は、子ども達に音楽の勉強を強要する事よりは、子ども達がやりたい音楽を優先している。先程紹介したミュージックアンバサダーの 2 名を選任し、2 人が代表して、子ども達の意見を集約している。

視察したグループの 1 つに、音楽科長であるリアン先生の指導により、ロンドンロイヤルアルバートホールでの、コンサートを控えた練習も見学した。上級クラスの合奏は、他のグループとは違う、迫力を感じた。

別の会議室では、大人 5 人で打ち合わせをしていた。何を話し合っているか質問すると、音楽クラブの資金集めの方法や、子ども達が音楽に親しめる環境について議論していたとのこと。また、1 学期中に何を行うのか、コンサートをどのように実施するか、政府からの支援金の申し込み方法等を議論していた。このようなミーティングを、1 か月に 1 回程度、実施していると言う。

ここでは、在校生に限らず地域の子どもを対象にしている点は、特筆すべき点である。夜間のクラブ活動は、子どもの居場所づくりにも貢献していた。音楽の専門的なレッスンを受けられる子ども達は、恵まれた環境

にある。指導者や子ども達の熱のこもった練習風景に触れ、「音楽の街かわさき」を標榜する本市も、こうした取組を学ぶ意義はあったと考える。

本市の学校における放課後の活動に、取り入れる事はできないか、検討する余地はあると考える。



＜総括＞

シェフイールド子ども大学やバーチャルスクールの取組は、「一隅を照らす」意味で、全ての子どもを対象にした、取りこぼしのない教育に、貢献していると理解した。子ども達の興味のあるようなボックスを企画し関心を誘う。将来に必要なスキルを身に付けさせる。学びや経験は「楽しんで」やるを、強調していたのは、納得いくところである。

日本ではその殆どを、専門とした民間に依存しているが、シェフイールドではサービスの提供を、行政、学術機関、民間により、ボランティア精神のもと、連携して取り組んでいる。その点は、注目すべきである。関係機関の「連携と協力」は、様々な背景のある子ども達の育成を支え、重要な要素となっていた。

また、このようなプログラムを経験した子供達は、卒業してからもボランティア活動に参加するという効果は特筆したい。教育の成果の好循環の表れだと理解した。

CUの導き出した8つのスキルは、大人になって役立つ能力だと理解した。本市の教育カリキュラムの中でも、必要なスキルを学ぶ機会の導入はできないか、検討しても良いと考えた。